

【研究内容 学校行事】

一人一人が学校のリーダーとして活躍し、自己有用感の醸成を図る学校行事の在り方
～学校の活性化につなげる6年生の学校行事への参加の仕方～

秋田県大潟村立大潟小学校
教諭 伊藤 文恵

1 主題設定の理由

(1) はじめに（本校の概要）

秋田県中央部に位置する大潟村は、今から約半世紀以上前に日本で2番目の面積を誇る八郎潟を干拓してできた村である。広大な土地（約170km²）を有する大潟村は、大規模農業を本格的に行うモデル農村としてスタートした。その70%以上が農地であり、生活は、「総合中心地」と呼ばれている村の西中央部にある一区画で行われている。主な施設も総合中心地内に集中していて、大潟小学校はその総合中心地のほぼ中央に位置している。

児童数147名（令和3年度）で、各学年1クラスずつ、職員17名の小規模校である。大潟小学校は平成30年（2018年）に創立50周年を迎えた、近隣では比較的歴史の浅い学校である。児童は、小学校隣に位置しているこども園から進学し、小学校と併設になっている中学校へと進学する。大潟村では、1つの小学校、1つの中学校ということで創立当時から小学校と中学校は併設されており、またこども園（当時は幼稚園）も隣接している。そのことから、園・小・中連携教育に力を入れて、村全体で子どもたちを育てるという意識が高い。

(2) 本校児童の課題

子どもたちは、こども園時代からメンバーがほぼ変わらず中学校まで過ごすことになる。そのため、男女や学年によらず互いに関わり合い、仲良く過ごせる子どもが多いが、自己有用感をもてなかったり、自己主張をしすぎたりする子どもも見られる。また、明るく素直な面もあるが、自ら創意工夫をして自主的に活動したり、最後まで粘り強く取り組んだりする力は十分ではない。

特に今年度の6年生は昨年度の県学習状況調査質問紙で、「自分にはよいところがある」という設問に対し、13.6%の児童が当てはまらないと否定的な回答をしている。これは県平均の2倍以上になっている。

(3) 主題設定の理由

6年生は「学校の顔」として、様々な場面で活動することが多くなる学年である。いつも同じ集団で生活してきた児童に対し、小学校最高学年になったことをきっかけに学校行事に積極的に参画し、個々の活躍の場を与えたり、お互いのよさを認め合う時間を確保したいと考えた。個々の役割を責任を持って行い、互いのよさを認め合える学級集団を形成することは、自己有用感の醸成につながり、さらには学校の活性化にもつながると考えた。

教職員でこのことを共通理解し、全校体制で6年生をサポートしながら、6年生が主体的に学校行事を創り上げる実践を積み上げることによって、リーダーとしての自覚を促し、自己有用感の醸成を図れると考え、本研究主題を設定した。

(4) 研究のねらい

6年生が学校行事で自主的、実践的な活動を行えるようにするために次の点を実践する。

- ①学校行事の意義を理解し、今年度実施計画へ意見を出す。
- ②学校行事で一人一役以上の役割分担をして、自己目標を設定する。
- ③行事を実践する。
- ④活動の振り返りを行う。

学校行事では必ず一人一役を設定することにより、個々に責任感をもたせることと自分が参画している意識をもたせることをねらった。また、振り返りは行事作文や感想だけで終わらないようにし、自己のがんばりと他学年の反応なども実感できるように工夫した。また、6年生の取組に対して職員が称揚したり、学校報や学校ブログで紹介したりするなどして、保護者や地域の人にも伝えられるようにした。

2 実践の概要

学校行事は、全校または学年という大きな集団を単位として行われる活動である。本校の場合、各学年が単級であることから大きな集団として考えられるのが、全校や学団などの異学年で行う行事などである。それらの行事を通して6年生が学校のリーダーとしての意識を醸成できるように、活動に取り組んできた。

(1) 全校行事での実践

①入学式

新入学児童16名を迎える儀式的行事に、6年生になったばかりの23名が受付や教室案内、式での歓迎の言葉などを分担した。最上級生としての初めて学校行事に、積極的に取り組む姿が見られた。



(1年生を迎える会 6年生がマイクを補助)

②1年生を迎える会

6年生企画による文化的行事である。計画から全校への呼びかけ、飾り付け、当日の進行などすべて6年生が分担して行った。学校の決まりを劇にして、途中、クイズなどを入れながら分かりやすくなるような工夫も見られた。1年生の「楽しかった」「面白かった」という感想を笑顔で聞く6年生が印象的だった。

③運動会

計画委員会を中心に全校で運動会に向けて取り組んだ。運動会テーマを全校から募集し計画委員会で集約して決定した。

また、役割分担をして各係で6年生がリーダーを担当した。その中で各色の団長(3名)は、各色の応援を企画して指導に当たった。開会式では、各色の団長が運動会にかける思いをスピーチする機会を設けた。さらに、学団色別対抗全員リレーの戦術、練習も団長を中心に行った。



(運動会開会式で各色の団長のスピーチ)

このほかにも、6年生は毎年運動会で披露している大渦音頭を1年生に指導した。一緒に踊って見せて、さらに個別に優しく指導する姿が見られた。

行事終了後の振り返りで、「団長はやりがいがあった。」「優勝はできなかったけど、みんなでまとまってやることができた。」などと述べており、充実した活動ができたことがわかった。

(2) 異学年交流の行事等での実践

①縦割り班活動

児童のつながりをより多く体験できるように、縦割り班活動を教育過程の中に位置づけている。5月の顔合わせ集会から始まって、10月には縦割り班でなべっこ会（今年度はコロナ禍で中止）や縦割り班自由遊びなどを行った。

また、活動の一つとして縦割り班清掃がある。6年生が班長となり、役割分担の指示や低学年に清掃指導を行っている。

②1・6年兄弟学年交流

・なかよし登校

入学したばかりの1年生と同じ住区の6年生は、1年生が学校に慣れるまでの2週間程度、一緒に登校する。通学路や登校の仕方を覚えることを目的に行う。6年生が、入学前の1年生にお迎えの手紙を出して実施した。きちんと時間通りに迎えに行き、一緒に登校する姿があった。

・菜園活動

昨年度5年生の時点で、園・小交流もかねて、年長さんと交流をスタートしている。1年生と6年生の交流による菜園活動は継続して行っており、今年度はサツマイモの苗植え、草取り、芋掘り活動を一緒に行った。芋掘り際には、6年生が芋の周りの堅い土を掘り進め、1年生に収穫させてあげる姿があった。



(1・6年生のサツマイモ掘り)

3 成果と課題

(1) 成果

- ・児童の全国学習状況調査（令和3年5月27日）の質問紙の結果を見ると、「自分にはよいところがあると思うか」という質問に対し、肯定的な回答（当てはまる、やや当てはまる）が81.8%（全国76.9%）であった。その回答の中で「当てはまる」と答えた割合は50%（全国36.2%）で、かなり強く自己有用感をもっているといえる。しっかり自分の役割をもたせること、その活動を教師を含め周りがしっかり認めたことがこの結果につながったと考える。
- ・また、「難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦していますか」という質問に対し、81.8%（全国70.9%）が肯定的な回答をしていて、その中で「当てはまる」と答えた割合は40.9%（全国24.4%）であった。学校のリーダーとして「やってみよう」という意欲が出てきていると感じられる。

(2) 課題と今後の見通し

- ・学校行事において6年生が中心となった活動が展開されている。リーダーシップを発揮させるという目的は概ね達成できているが、全校児童の関わり方の工夫は必要である。それぞれの学年に応じた関わり方を工夫し、学校という1つの社会への所属感を感じられるようにする必要がある。
- ・学校行事を通して、協力して実施する喜びや全校で実施したときの達成感を次の機会に活かす姿勢を育てる必要がある。今年度の6年生の活躍を次の5年生や4年生に自然に引き継げるような工夫が大切だと感じる。